

## eventbrite 日本語訳 (英国UCLより)

### 【内容】

今年は、20世紀の日本を代表する作家、夏目漱石の生誕150周年にあたります。漱石は、愛媛県尋常中学校（現：松山東高等学校）、第五高等学校（現：熊本大学）で教鞭をとった後、1900年から1902年の2年間、ロンドンに渡り、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン（UCL）に留学します。帰国後、東京帝国大学（現：東京大学）の講師となり、留学経験を生かして、作家としての活動を開始します。そのため、漱石の作品は、シェイクスピアやその他のイギリス人作家から影響を受けたことが指摘されています。

欧米においては、川端康成や三島由紀夫に比べて、漱石の知名度は劣ります。しかし、日本における漱石の影響力は甚大なものです。たとえば、『こころ』などの漱石の作品は、中学校や高等学校の国語の教科書に採用されており、イギリスにおけるシェイクスピアのように、漱石の作品を知っていることが、しばしば常識としてみなされます。現代を代表する作家であり、ノーベル文学賞の有力候補と言われている村上春樹もまた、もっともお気に入りの日本人作家として、漱石を挙げています。漱石が残した偉大な業績をたたえて、千円札紙幣には漱石の肖像が使われていました。

今年の7月に、第3回UCLジャパン・ユース・チャレンジが行なわれます。このイベントは、日本とイギリスの高校生の交流を目的としたサマー・スクールです。今年は「英国での漱石」をテーマにしています。漱石の研究者である、ダミアン・フラナガン博士が、「漱石とシェイクスピアの関係」について講演します。また、岩波書店からUCL図書館に『漱石全集』が寄贈されることを記念して、レセプションを行います。このレセプションでは、全集の寄贈式に加えて、『坊っちゃん』の舞台となった松山東高等学校の生徒が、「松山での漱石」について、プレゼンテーションを行います。